

津 軽 方 言 の 音 韻 規 則

小 林 泰 秀

Phonological Rules of the Tsugaru Dialect of Japanese

Yasuhide KOBAYASHI

Abstract

The Tsugaru Dialect is spoken in the western part of Aomori Prefecture, which is the northernmost prefecture in Honshuu. The purpose of this paper is to represent various phonological rules by which the phonetic forms from the underlying representations are derived. The ordering of rules is often crucial to derive the correct phonetic representations.

この論文は津軽方言の音韻規則を述べるものであるが、高さアクセント (pitch accent) の点にはほとんど触れていない。次の音声記号のうち、[š] は [ʃ], [c] は [ts], [j] は [dz], [j] は [dʒ] のことである。

語彙	基底表示	音声表示
1. 地図	tizu	c̄i j̄i
2. 珍事	tinzi	c̄i j̄i
3. 月	tuki	c̄i gi
4. 次	tugi	c̄i pi
5. 土	tuti	c̄i j̄i
6. 菓子	kasi	kasi
7. 火事	kazi	k̄a j̄i
8. 監事	kanzi	k̄a j̄i
9. 崖	gake	gake
10. 径我	kega	k̄e pa
11. 枝	eda	ēda

12. 歌	uta	udā
13. 雨	ame	amē
14. 人	pito	çito, sīto, xeto
15. 蛇	pebi	xebī
16. 蟹	potaru	χodarū
17. 花	pana	χanā
18. 船	pune	Φune, χune
19. 背中	senaka	xenaga, ſenaga
20. 箎	zaru	jaru, jaru
21. 風	kaze	ka~je, ka~je
22. 馬	uma	ma, mma
23. 猫背	neko+se	negoje, negoje
24. 船船	pune+pune	Φunebunē, χunebunē
25. 買わない	kaw&ana&i	ka~wanē, kaanē, kanē
26. 買えない	kaw&e&na&i	kaēnē, kenē
27. 食わない	kuw&ana&i	kuwanē, kuane, kanē
28. 食えない	kuw&e&na&i	kuenē, kenē
29. 酷い	pido&i	çidē, xedē, sidē
30. 痒い	kayu&i	kayī, kaē, ke
31. 可愛い	kawai&i	kawe, kaē
32. 1本	iti:pon	eppo, epo
33. 8冊	pati:satu	χassacī, χasacī, hasacī
34. 6冊	roku:satu	rokusacī
35. 6巻	roku:kan	rokka, roka

この論文に使われている境界要素は、[#] が単語境界，[+] が内部単語境界（複合語の内部境界），[&] が形態素境界，[:] が複合境界である。境界は規則の適用に於いては階層(hierarchy)をなしており，[#] が適用出来る規則には[+]，[&]，[:] も適用され，[+]境界で適用出来る規則には[&]と[:]の境界があるものにも適用出来，[&]の適用出来るものには[:]も適用出来る。特に境界の記述のない規則は，境界に関係なく適用出来るものである。

津軽方言の高母音 /i/, /u/ は、標準語よりは少し中舌母音に寄ったものであり、音声記号で表わすと [i], [ɨ] であろうが、中舌母音 [ɨ] と同じではない。[i], [ɨ] は活字の都合上、この論文では [i], [u] と表している。津軽方言の母音の音声を図で表わすと次のようになる。

i	ɨ	u
e		o
	a	

津軽方言の基底表示から音声表示が派生される規則を、適用順序に従って述べよう。

1. 高母音消去

A. 複合境界[:]の前の母音の消去

$$1 A. \left[\begin{array}{c} V \\ +high \end{array} \right] \rightarrow \phi / [+syl] \left\{ \begin{array}{l} +anterior \\ -voice \\ -anterior \\ -coronal \\ -voice \end{array} \right\}_1 : \left\{ \begin{array}{l} -voice \\ -anterior \\ -coronal \\ -voice \end{array} \right\}_1$$

$\left\{ \begin{array}{c} A \\ B \end{array} \right\}_1 - : \left\{ \begin{array}{c} C \\ D \end{array} \right\}_1$ の意味は、上は上、下は下の環境で、という意味である。つまり、A—:C, B—:D である。

この規則によって、前方性 (anterior) 無声子音 /p, t, s/ の次の高母音が次に無声子音が来る場合消去されるか、あるいは /k/ と /k/ の間の高母音が消去される。/t/ と非舌頂的子音 (-coronal) の間に来る高母音が消去される例として次のものがある。

iti:pon→itpon 「一本」、totu:puu→totpuu 「突風」、iti:pin→itpin 「一品」、betu:pyoo→betpyoo 「別表」、iti:kan→itkan 「1巻」、patu:ken→patken 「発見」、satu:ki→satki 「殺気」。

/t/ と菌茎音の間に来る高母音消去の例としては次のものがある。

pati:satu→patsatu 「8冊」、iti:šo→itšo 「一緒」、katu:te→katte 「勝手」。

消去される高母音の前の無声音が /p/ の場合は例が少なく、zipu:satu→zipsatu 「10冊」、zipu:pon→zippon 「10本」位であろうか。「10」には [juu] という発音もあるので、その基底表示を /ziwu/, あるいは /ziw/ とし、/w/ が次の子音に完全同化されるとも考えられようが、[juu] は /zipu/→/ziΦu/→/ziwu/→/zywu/→/zyuu/→[juu] と派生されたと考える。/s/ と無声子音間に来る高母音も規則に従って消去されるのであるが、実際には適用され

る語がないようである。susi+tume (→sisi[̄]jime[̄])「鮓詰め」、kasi+pako (→kasi[̄]bago)「菓子箱」等は内部単語境界が間にある為、1 Aの規則は適用されない。

高母音の前が /k/ であり、後が舌頂的子音 (coronal) である場合は、高母音は消去されず、次のように無声音になる。

rokusaci[̄]「6冊」、sakuša[̄]「作者」、dokušo[̄]「読書」、kakusi[̄]「確信」、gakuto[̄]「学徒」、rokuto[̄]「6等」、hakuču[̄]「白昼」。

高母音の無声化については後でくわしく述べるが、高母音にアクセントがあると、paku[̄]si→hagusi[̄]「白紙」のように無声音にならない。

二つの /k/ の間の高母音は、次の例のように消去される。

roku:kan→rokkan「6巻」、doku:kai→dokkai「読解」、saku:ka→sakka「作家」、gaku:koo→gakkoo「学校」、paku:kyuu→pakkyuu「白球」、saku:kon→sakkon「昨今」、saku:kyoku「作曲」、saku:kaku→sakkaku「錯覚」、toku:ken→tokken「特権」。

/k/ と /p/ の間の高母音は、通常、saku:pin (→saguci[̄])「作品」、saku:puu (→sagu[̄]puu)「作風」、doku:paku (→dogu[̄]yagu)「独自」、toku:pitu (→togucic[̄]i)「特筆」、doku:pitu (→dogucic[̄]i)「毒筆」のように消去されないのであるが、roku:pon→rokpon「6本」、doku:po→dokpo「独歩」のように消去されるものもある。なお、「引っ張る」、「引っ付く」は、語幹を /pik/ とすれば、pik&paru、pik&tuku と形態素境界で結ばれているので、高母音消去規則が適用されずに、子音同化規則が適用されたものであると考えられる。

1 Aの規則が示すように、境界 [:] の前の語は、二音節以上のものでないと適用されない。

ti:ku→*tku「地区」、ku:kan→kkan「区間」。

B. 形容詞接尾辞/i/の前の母音の消去

$$1 B. \left[\begin{array}{c} V \\ +high \end{array} \right] \rightarrow \phi / [+coronal] \text{---} \& \left[\begin{array}{c} V \\ +high \\ -back \\ +Adjective \end{array} \right]$$

これは随意的な規則であるが、舌頂的子音の次の高母音が /i/ の前で消去される。。

kayu&i→kayi「痒い」、atu&i→ati「暑い」、usu&i→usi「薄い」。

非舌頂的子音の次の高母音は消去されない。kemu&i→*kemi「煙い」、nemu&i→*nemi「眠い」、niku&i→*niki「憎い」、piku&i→*piki「低い」。

例外として sam/bu&i→sam/bi「寒い」がある。

1 Bは sugo&i「すごい」、pido&i「酷い」、tuyo&i「強い」、yowa&i「弱い」のような非高母音には適用されない。これらの語はそれぞれ sũ[̄]ŋe「すごい」、çĩ[̄]de「酷い」、ciye「強

い], *yowe* 「弱い」と発音されるので、母音消去規則が適用されていると思われるが、そうではなく、母音同化で /i/ が [e], /oe/, /ae/ が [ee] となり, [ee] が [e] と短く発音されると考えられる。津軽方言には *kayi* 「痒い」, *aci* 「暑い」, *usi* 「薄い」はあっても、**suɺi* 「すごい」, **ĩdĩ* 「ひどい」, **ciyi* 「強い」, **yowi* 「弱い」という発音はないのである。*ooki&i→oki* 「大きい」は /i/ が [-coronal] の次でありながら消去されているようであるが、*osi&i→osi* 「惜しい」と同じく、1 B の規則とは別の、後で述べる同一母音消去規則によって、/i&i/ が [i] となるのである。

2. 鼻音挿入

$$2. \phi \rightarrow \left[\begin{array}{c} C \\ +nasal \end{array} \right] / [\quad] \text{---} \left[\begin{array}{c} -sonorant \\ +voice \end{array} \right]$$

有声阻害音 (voiced obstruent) の前に鼻子音が挿入される。

tizu→tiNzu 「地図」, *tugi→tuNgi* 「次」, *kazi→kaNzi* 「火事」, *eda→eNda* 「枝」, *pebi→peNbi* 「蛇」, *mizu→miNzu* 「水」。

この規則は語頭と共鳴音 (sonorant) の前には鼻音を挿入しない。

*gomi→*Ngomi* 「ごみ」, *ame→*aNme* 「雨」, *potaru→*potaNru* 「螢」, *kayui→*kaNyui* 「痒い」。

普通の話し方では *cĩjĩĩ* 「地図」のように阻害音が鼻音化しているので、鼻音挿入よりもむしろ有声阻害音の鼻音化 (*z→z̃*, *g→g̃*, *d→d̃*, *b→b̃*) の方が妥当のように思えるが、ゆっくり話す時には *cĩnjĩĩ* 「地図」, *kānjĩĩ* 「火事」, *ẽndã* 「枝」, *xẽmbĩĩ* 「蛇」, *mĩnjĩĩ* 「水」のように /N/ がはっきり聞かれるので、鼻音挿入が必要である。

3. 高母音の無声化

$$3. \left[\begin{array}{c} V \\ +high \\ -accent \end{array} \right] \rightarrow [-voice] / \left\{ \begin{array}{l} \left[\begin{array}{c} -anterior \\ -coronal \\ -voice \end{array} \right] \text{---} \left[\begin{array}{c} +coronal \\ -voice \end{array} \right] \text{ (A)} \\ \left[-voice \right] \text{---} \left[-voice \right] \left[\begin{array}{c} V \\ -high \end{array} \right] \text{ (B)} \end{array} \right.$$

3 A によって、/k/ と /t, s/ の間の高母音が無声音となる。

kusi→kusĩ 「串」, *kiti→kitĩ* 「きつい」, *kutu→kutũ* 「靴」, *kusuri→kusurĩ* 「薬」。

後の方の無声子音が非舌頂的であれば、高母音の無声化は起らない。

*kiku→*kiku* 「菊」, *saku:pun→*sakupuu* 「作風」, *doku:paku→*dokupaku* 「独白」。

3 B は、無声子音間のアクセントのない高母音が、次に非高母音が来ると無声音になる規則である。

pito→p̄ito 「人」, tikai→tik̄ai 「近い」, sita→sit̄a 「舌」, puta→put̄a 「蓋」, putoi→put̄oi 「太い」, kita→kit̄a 「北」, kukyoo→kuk̄yoo 「苦境」, kiša→kiš̄a 「汽車」, matu+kasa→matuk̄asa 「松毬」, matu+kaze→matuk̄aze 「松風」, kosi+kake→kosik̄ake 「腰掛け」, mati+kado→matik̄ado 「町角」。

なお、3Bの規則には、内部単語境界 [+] が高母音を含む音節の前にある場合には適用されないという条件が必要であるが、くわしくは、次の複合語有声化規則の所で述べよう。

高母音が二番目の無声子音の次に来る場合には、3Bの規則は適用されない。

puku→*puku 「服」, tuti→*tuti 「土」, tuki→*tuki 「月」, pusi→*pusi 「節」, puti→*puti 「緑」, susi→*susi 「寿司」, suki→*suki 「好き」, puki→*puki 「落」, tukue→*tukue 「机」。

高母音にアクセントがある場合には無声化は起らない。

kis̄i→*kisi 「岸」, okita→*okita 「起きた」, kakusu→*kakusu 「隠す」。

3の規則の適用されない多くの阻害音は、後でくわしく述べるが、複合語有声化規則、あるいは、子音の有声化規則で有声音になる。

外来語は、アクセントのない高母音はすべて無声子音間で無声音になる。

sukii 「スキー」, sukuuru 「スクール」, sučiimu 「スチーム」, irukuucuku 「イルクーツク」, gesuto 「ゲスト」, sutoobu 「ストーブ」, masukotto 「マスコット」, sukuutaa 「スクーター」。

外来語でもアクセントのある母音は無声音にならない。

čikin 「チキン」, kisu 「キス」。

高母音無声化の一般的規則を述べたが、この規則には個人差も多い。前の無声子音が両唇破裂音 /p/ であり、うしろの無声子音の次に二つ以上の音節がある場合、無声子音間の高母音を無声音にする場合もある。規則としては次のようである。

$$3(a) \left[\begin{array}{c} V \\ +high \\ -accent \end{array} \right] \longrightarrow [-voice] / \left[\begin{array}{c} +anterior \\ +coronal \\ -voice \end{array} \right] \longrightarrow [-voice] \dots \left[\begin{array}{c} \\ \\ \\ \end{array} \right]_{syl} [+syl]$$

pukusoo→pukusoo (→Φukusoo) 「服装」, pituzi→pituzi (→cicij̄i) 「羊」, pikute→pikute (→^{3A}cikute) 「引く手」。

「服」, 「引く」は二音節であればそれぞれ Φugu, cigu であって、無声化は起らない。

4. 複合語の有声化

$$4. \left[\begin{array}{c} C \\ +Native \end{array} \right] \longrightarrow [+voice] / [+voice] + \text{---}$$

複合語の二番目の語の最初の子音、つまり、内部単語境界の次の子音が有声音となる。

neko+se→nekoze「猫背」、pune+pune→punebune「船船」、sumi+koya→sumigoya「炭小屋」、mika+tuki→mikaduki「三日月」、niku+tuki→nikuduki「肉付き」、tosi+kasira→tosigasira「年頭」、piza+kasira→pizagasira「膝頭」。

又、「膝株」が pizagabu とならないのは、kabu の b が有音である為、異化が起ったものと考えられると、日野資純氏（個人的な手紙による）が指摘して下さった。

規則 4 は、規則 3 が適用された語、例えば、matu+kasa³→matukasa「松毬」、mati+kado³→matikado「町角」には適用されない。又、漢語にも適用されない。

saku:puu→*sakubuu「作風」。

複合語有声化は、鼻音挿入の次に適用されるべき規則である。

	neko+se	pito+pito
鼻音挿入	—	—
複合語有声化	nekoze	pitobito

規則 3 と 4 の順序は counter feeding order、つまり、規則 4 が規則 3 を counter feed している為、順序を逆にすると間違った形を派生する。

	neko+se	pito+pito
複合語有声化	nekoze	pi obito
鼻音挿入	nekoNze	pitoNbito

なお、negōje^{~e}「猫背」、citōbito^{~ito}「人々」という発音が存在する所があれば、そこでは、複合語有声化→鼻音挿入の順序が正しいことになる。

高母音無声化と複合語有声化の順序はどうであろうか。高母音有声化が適用される matu kaze「松風」、matikado「町角」には、もはや有声化規則が適用されなくなるので、高母音無声化→複合語有声化の順序が正しい。

しかし、pito「人」、sita「舌」のように高母音を無声音にしてから複合語有声化規則を適用すると、「人々」、「猫舌」は pito+b₀ito、neko+z₀ita という不自然で、かつ発音不可能な音声が生じられる。従って、高母音無声化は高母音を含む音節の前に内部単語境界がある場合には行われぬ。つまり、#pito# と #sita# は pito、sita となるが、+pito、+sita の i は無声音にならない。

	pito+pito	neko+sita
高母音無声化	pito+pito	—
複合名詞有声化	pitobito	nekozita

又、この適用順序を複合語有声化→高母音無声化にしても正しい派生が出来るようである

が、そうすると、「松毬」, 「町角」のような語が *matugasa*, *matigado* になってしまう。同じような複合名詞「松風」, 「腰掛け」を含めて、これら複合語の境界が、「人々」, 「猫背」とは別のもの、例えば *matu:kasa*, *kosi#kake* のように [:] や [#] であるとも考えられようが、私には境界の違いの設定には無理があり、又、境界の設定だけで解決出来る問題とは思われない。

5. 破 擦 音 化

/z/ と /d/ が [j] になり、/t/ が [c] になる。まず /z/ から述べよう。

$$5\ A. \left[\begin{array}{l} +\text{anterior} \\ +\text{coronal} \\ +\text{voice} \\ +\text{strident} \end{array} \right] \rightarrow [-\text{continuant}]$$

有声歯茎摩擦音は破擦音となる。

tiNzu→*tiNju* 「地図」, *kaNzi*→*kaNji* 「火事」, *zaru*→*jaru* 「筧」, *amezora*→*amejora* 「雨空」, *nekoze*→*nekoje* 「猫背」。

次に /t/, /d/ が破擦音になる規則を述べよう。

$$5\ B. \left[\begin{array}{l} +\text{anterior} \\ +\text{coronal} \\ -\text{nasal} \\ -\text{continuant} \end{array} \right] \rightarrow [+ \text{strident}] / \text{---} \left[\begin{array}{l} V \\ +\text{high} \end{array} \right]$$

歯茎閉鎖音が高母音の前で破擦音になる。

tiNju→*ciNju* 「地図」, *tuki*→*cuki* 「月」, *tuti*→*cuci* 「土」, *mika+duki*→*mikajuki* 「三日月」, *pana+di*→*panaji* 「鼻血」。

複合語有声化→破擦音化の順序は *feeding order* である。従って、有声化規則の適用される「雨空」, 「猫背」, 「三日月」, 「鼻血」に、更に、破擦音化規則が適用出来る。

6. わたり音消去

$$6. \left[\begin{array}{l} -\text{syllabic} \\ -\text{consonantal} \end{array} \right] \rightarrow \phi / \text{---} \left[\begin{array}{l} V_0 \\ -\text{NOUN} \end{array} \right] \& V$$

/w/ と /y/ は次に形態素境界をはさんで母音が来る場合消去される。しかし、消去されるわたり音を含む形態素は、名詞であってはならない。V₀ は 0 以上の母音を意味する。

kaw&ana&i→*kaanai* 「買わない」, *kaw&e&na&i*→*kaenai* 「買えない」, *kuw&ana&i*→*kuanai* 「食わない」, *kuw&e&na&i*→*kuenai* 「食えない」, *kawai&i*→*kaaii* 「可愛い」, *kayu&i*^{1B}→*kay&i*→*kai* 「痒い」, *tuyo&i*→*tuoi* (→*tuee*) 「強い」, *yo&i*→*oi* (→*ee*) 「良い」,

araw&i→arai「洗い」、yow&i→yoi「酔い」。

「洗い」、「酔い」は名詞であるが、araw&、yow& は動詞の語幹であり、この規則が適用される。oya「親」、kawa「川」、niwa「庭」は名詞である為、そのわたり音は消去されない。又、kayu&sa「痒さ」、yo&sa「良さ」の /y/ は、形態素境界 [&] の次が子音である為消去されない。しかし、/w/ の場合は、koasa「怖さ」、yoasa「弱さ」のように消去されることがある。waka&i「若い」、waru&i「悪い」の /w/ と、yowa&i「弱い」、yow&i「酔い」の /y/ が消去されないのは、形態素境界 [&] から左への最初の子音でないからである。

この規則には、必然的なものと随意的なものが一緒に書かれているという問題がある。/y/ の消去は、kayi「痒い」、ciye「強い」のような発音があるので随意的なものであるが、/w/ は /a/ の前と /e/ の前 (kawē「可愛良い」、yowē「弱い」) には随意的に消去されるが、/i, u, o/ の前では必然的に消去される。まず必然的にわたり音を消去する規則が必要と思われるが、ここに一つの規則として簡単に書いた次第である。

7. 中母音化

$$7. \left[\begin{array}{c} V \\ +high \end{array} \right] \rightarrow \left[\begin{array}{c} -high \\ -low \end{array} \right] / \left[\begin{array}{c} V \\ -high \end{array} \right] \text{---}$$

高母音 /i/, /u/ は非高母音の次で中母音 /e/, /o/ になる。

kuenai→kuenae「食えない」、kawaii→kawai→kawaee「可愛良い」、pidoi→pidoe「酷い」、kayui^{1B}→kayi⁶→kai→kae「痒い」、koi→koe「恋」、osoi→osoe「遅い」、kaikei→kaekee「会計」、teisai→teesae「体裁」、peiwa→peewa「平和」、santou→santoo「3等」、goutou→gootoo「強盗」。

高母音の次では中母音にならない。

kayui→*kayue「痒い」、atui→*atue「暑い」、usui→*usue「薄い」、kemui→*kemue「煙い」、nikui→*nikue「憎い」。

又、語尾の /i/ は子音の次では /e/ にならない。

kami→*kame「紙」、uti→*ute「家」、asi→*ase「足」。

この規則は、kaikee「会計」、teesai「体裁」、santoo「3等」のように、/ei/ と /ou/ には必然的に適用されるが、saišo「最初」、toisi「砥石」、kai「貝」、sai「犀」、koi「恋」のように、/ai/ と /oi/ には、その語が名詞の場合は随意的に適用される。

前に触れたが、高母音 [i] と [u] は、かなり中央に寄ったものである。

8. 同 化

ばくぜんと同化と云うと、今まで述べた規則の中でも、高母音無声化は無声子音間で無声音になるという意味で、複合語有声化は有声母音間で有声音になるという意味で、中母音化は高母音が中母音の次で中母音になるという意味で、それぞれ一種の同化規則である。規則にはある意味での同化が非常に多いのだが、ここで述べる同化は、最も顕著な同化と云われる母音の完全同化と子音の完全同化、調音点同化である。

A. 母音の完全同化

$$8 A. V \rightarrow \left[\begin{array}{c} V \\ -\text{high} \\ -\text{back} \end{array} \right] / \text{---} \left[\begin{array}{c} V \\ -\text{high} \\ -\text{back} \end{array} \right] \text{.....}]_{-\text{NOUN}}$$

8 Aは、母音が /e/ の前で [e] となる完全同化規則である。

kae→kee「痒い」、oe→ee「良い」、pidoe→pidee「酷い」、osoe→osee「遅い」、akae→akee「赤い」、tiisae→tiisee「小さい」、tuyoe→tuyee「強い」、yowae→yowee「弱い」、kaanae→kaanee「買わない」、kuēnae→keenee「食えない」、suēnae→seenee「吸えない」、kaeru→keeru「帰る」。

又、名詞は通常中母音に同化されない。

daitai⁷→daetae→*deetee「大体」、taitei⁷→taetee→*teetee「大低」、saikai⁷→saekae→*seekee「再会」、kae→*kee「貝」、sae→*see「犀」、toesi→*teesi「砥石」、koe→*kee「恋、声」。

/oe/ が同化出来るのは形容詞のみである。従って次の語には適用されない。

moeru→*meeru「燃える」、poeru→*peeru「吠える」、yoe→*yee「酔い」、yoeba→*yeeba「酔えば」。

母音が三つ以上連続している場合は、一音節語になるのを避ける為、同化されない。

yoae→yoee→*yeee「弱い」、tuoē→tuee→*teee「強い」、payai⁶→paai⁷→paae⁸→pae→*peee「早い」、kaaee→*keeee「可愛良い」。しかし、kawaee→kaweee「可愛良い」、は二音節語である為同化される。

B. 子音の同化

$$8 B. \left[\langle \overset{C}{-}\text{nasal} \rangle \right] \rightarrow \left[\langle \overset{\alpha}{\beta} \text{ place manner} \rangle \right] / \text{---} \left[\begin{array}{c} -\text{sonorant} \\ \alpha \text{ place} \\ \langle \beta \text{ manner} \rangle \end{array} \right]$$

この規則は、子音はすべて次に来る阻害音と調音点が同じになり、更に、その子音が非鼻音であれば調音法も同じ、つまり完全同化になるものである。

調音点同化は鼻子音に起る。

ciNju→cinju「地図」、cuNgi→cuŋgi「次」、kaNji→kanji「火事」、peNbi→pembī「蛇」、

eNda→enda「枝」。

完全同化は鼻音以外の子音に見られる。

itpon→ippon「1本」, patsacu→passacu「8冊」, jipsacu→jissacu「10冊」, totpuu→toppuu「突風」, kir&ta→kitta「切った」, kuw&te→kutte「食って」。

共鳴音 (sonorant) に子音は同化されない。

kaw&ru→*karru「買う」, kak&ru→*karru「書く」。

9. 両唇閉鎖音の摩擦音化

/p/ は次に述べるAからFの規則にみられるように、次に来る母音によって、[Φ], [χ], [h], [x], [c], [s] に発音される。

この論文で使われる摩擦音は、Chomsky-Halle (1965) に従い、それぞれ次のような弁別的素性で区別される。

	両唇音 bilabial	歯音 alveolar	硬口蓋歯音 palato-alveolar	硬口蓋音 palatal	軟口蓋音 velar	口蓋垂音 uvular	声門音 glottal
	Φ	s	ʃ	ç	x	χ	h
anterior	+	+	-	-	-	-	-
coronal	-	+	+	-	-	-	-
high	-	-	+	+	+	-	-
back	-	-	-	-	+	+	-
low	-	-	-	-	-	-	+
continuant	+	+	+	+	+	+	+
strident	-	+	+	-	-	-	-

A. 両唇摩擦音化

$$9 A. \left[\begin{array}{l} + \text{anterior} \\ - \text{coronal} \\ - \text{high} \\ - \text{back} \\ - \text{low} \\ - \text{voice} \\ - \text{Onamatopeia} \\ - \text{Foreign} \end{array} \right] \rightarrow [+ \text{continuant}] / \left\{ \begin{array}{l} \# \text{---} \\ \text{V} \text{---} \text{V} \end{array} \right\}$$

語頭、あるいは母音間の /p/ が /Φ/ となる。この規則は、まず閉鎖音 /p/ を摩擦音にするものであり、次に来る母音にかかわらず適用される。

pito→Φito「人」, pemi→Φemi「蛇」, potaru→Φotaru「蟹」, pana→Φana「花」, pune→Φune「船」, sakupin→sakuΦin「作品」, dokupaku→dokuΦaku「独白」。

擬声語や外来語にはこの規則は適用されない。

parapara → *ΦaraΦara 「バラバラ」, supuun → *suΦuun 「スプーン」。

又、語頭以外の /p/ は、母音間でのみ摩擦音になるので、次の /p/ は [Φ] にならない。

sampo → *samΦo 「散歩」, ippon → *ipΦon 「1本」。

B. 口蓋垂摩擦音化

$$9 B. \left[\begin{array}{l} -\text{coronal} \\ -\text{high} \\ -\text{back} \\ -\text{low} \\ +\text{continuant} \end{array} \right] \rightarrow [+back] / \text{---} \left[\begin{array}{c} V \\ +back \end{array} \right]$$

/Φ/ は後舌母音 /u, o, a/ の前では [χ] と発音される。/Φ/ が /u/ の前で [χ] になるのは随意的であり、[Φu] と [χu] は自由変異である。

Φune → χune 「船」, Φotaru → χotaru 「蜃」, Φana → χana 「花」。

C. 声門摩擦音化

$$9 C. \left[\begin{array}{l} -\text{coronal} \\ -\text{high} \\ -\text{back} \\ -\text{low} \\ +\text{continuant} \end{array} \right] \rightarrow [+low] / \text{---} \left[\begin{array}{c} V \\ +low \end{array} \right]$$

/Φ/ が /a/ の前で声門音 [h] に発音されることがある。[χa] と [ha] の主な違いは、強調して去う時には [χa] であるが、低い声で、リラックスして云う時には [ha] も聞かれる。

Φana → hana 「花」, Φana → hana 「鼻」, Φaru → haru 「春」。

規則 9 B と 9 C は音韻上、弁別的素性が一つだけ変わるという意味で非常に自然な規則である。9 B では母音 [+back] の前で子音が [+back] になり、9 C では母音 [+low] の前で子音が [+low] になっている。

D. 軟口蓋摩擦音化

$$9 D. \left[\begin{array}{l} -\text{coronal} \\ -\text{high} \\ -\text{back} \\ -\text{low} \\ +\text{continuant} \end{array} \right] \rightarrow \left[\begin{array}{l} -\text{anterior} \\ +\text{high} \\ +\text{back} \end{array} \right] / \text{---} \left[\begin{array}{c} V \\ -\text{high} \\ -\text{back} \end{array} \right]$$

/Φ/ は /e/ の前で [x] になる。

Φembi → xembi 「蛇」, Φenka → xenka 「変化」。

中には Φe 「屁」のように規則が適用されない語もあるが、これは擬声的な面が残されているのかも知れない。「火」は次の 9 (a) の規則で [xe] となり、「屁」と「火」を区別する。

もっとも、若い人は区別をせず、両方を [xe] と発音しているようである。

前に /i/ が [e] になる中母音化規則を述べたが、/pi/ は [ci], [sɨ] と発音されると同時に、[xe] と発音される場合も多い。更に、/i/ は音節の最初に来る場合 [e] に発音されるので、次のような規則が書ける。

$$9(a) \left[\begin{array}{c} V \\ +high \\ -back \end{array} \right] \rightarrow [-high] / \left[\left[\begin{array}{c} -coronal \\ +continuant \end{array} \right] \right] \text{---}$$

/i/ が /p/ の次に来る場合 [e] となると考えるよりは、/p/ が /Φ/ になり、/Φ/ の次の /i/ が [e] となると考える方が自然であろう。それは /pi/ が /pe/ になるのであれば、同じような環境にある /ki/ も /ke/ になるのが当然と思われるからである。

9 Aの適用後、9(a)が適用され、更に9 Dが適用される例を挙げよう。

pito^A→Φito^A→Φeto^D→xeto 「人」, pi^A→Φi^A→Φe^D→xe 「火」, a-piru^A→aΦiru^A→aΦeru^D→axeru 「家鴨」, ge-pin^A→geΦin^A→geΦen^D→gexen 「下品」, pinde^A→Φinde^A→Φende^D→xende 「ひどい」, picunji^A→Φicunji^A→Φecunji^D→xecunji 「羊」, pikaru^A→Φikaru^A→Φekaru^D→xekaru 「光る」, pirosaki^A→Φirosaki^A→Φerosaki^D→xerosaki 「弘前」。

更に9(a)の規則によって、語頭の /i/ が [e] になる。

ie[̄]→ee[̄] 「家」, ikko→ekko 「1 箇」, inu→enu 「犬」, ika→eka 「鳥賊」。

語頭でない /i/ は [e] とはならない。

aki→*ake 「秋」, kanjiru→*kanjeru 「かじる」, sikasi→*sekase 「しかし」。

9(a)の規則は音節の最初の /i/ を [e] にするものであるが、実際には語頭の /i/ にのみ適用される。ka[̄]-i 「貝」, a[̄]-i 「愛」 ([-] は音節境界である) の /i/ が [e] になり、[kae], [ae] と発音されるのは、前に述べた中母音化規則が適用されたものと考えの方が自然であると思われる。又、acu[̄]&i 「暑い」, ooki[̄]&i 「大きい」の /i/ は前の音節と一つの音節を形成し、atu[̄]&i^{1B}→at&i[̄]→a-ti[̄], ooki[̄]&i[̄]→oo-kii[̄]→oki[̄] (後の規則13) のようになる。/i/ がすぐ前の音節に入らず、一つの音節 (モーラと云った方が良いでしょう) として発音される場合には、その前の境界が [&] であり [-] ではないので、規則9(a)は適用されない。

atu[̄]&i[̄]→acu[̄]i[̄]→*acue[̄], ooki[̄]&i[̄]→ookii[̄]→*ookie[̄]。

E. 硬口蓋摩擦音化

$$9 E. \left[\begin{array}{c} +anterior \\ -coronal \\ -high \\ -back \\ -low \\ +continuant \end{array} \right] \rightarrow \left[\begin{array}{c} -anterior \\ +high \end{array} \right] / \text{---} \left[\begin{array}{c} V \\ +high \\ -back \end{array} \right]$$

/Φ/ は /i/ の前で [c] と発音される。9(a)と9 Dは随意的規則であるので、適用されな

い語は 9 E が適用される。

Φ_{ito}→çito 「人」, aΦ_{iru}→açiru 「家鴨」, Φ_{inde}→çinde 「酷い」, Φ_{icunji}→çicunji 「羊」,
Φ_{ikaru}→çikaru 「光る」。

F. 歯茎摩擦音化

$$9 F. \left[\begin{array}{l} +\text{anterior} \\ -\text{coronal} \\ -\text{high} \\ -\text{back} \\ -\text{low} \\ +\text{continuant} \end{array} \right] \rightarrow [+ \text{coronal}] / \# \rightarrow \left[\begin{array}{l} V \\ +\text{high} \\ -\text{back} \end{array} \right]$$

/Φ/ は /i/ の前で [s] とも発音される。

Φ_{ito}→s_{ito} 「人」, Φ_{ikooki}→s_{ikooki} 「飛行機」, Φ_{irosaki}→s_{irosaki} 「弘前」, Φ_{inde}→s_{inde} 「酷い」, Φ_{icunji}→s_{icunji} 「羊」, Φ_{ikaru}→s_{ikaru} 「光る」。

/Φi/ が語頭にない場合は、9 F は適用されない。

*asiru 「家鴨」, *gesin 「下品」, *tokusicu 「特筆」。

9 A ~ F の規則をまとめてみると、/p/ はそのすぐ次に来る母音によって、次のようになる。

$$P \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \Phi / \text{---} u \\ s, c / \text{---} i \\ x / \text{---} e \\ \chi / \text{---} u, o, a \\ h / \text{---} a \end{array} \right\}$$

10. 鼻 音 化

鼻音化規則には次の三つがある。

A. /g/ の鼻音化

$$10 A. \left[\begin{array}{l} -\text{anterior} \\ -\text{coronal} \\ +\text{voice} \end{array} \right] \rightarrow [+ \text{nasal}] / [\quad] \text{---}$$

軟口蓋の有声音、つまり有声軟口蓋破裂音 /g/ は、その前に何らかの分節音がある場合、すなわち語頭以外の位置で [ŋ] になる。

keŋga→keŋga 「怪我」, sumi+koya→sumigoya→sumiŋoya 「炭小屋」, kagami→kaŋami 「鏡」。

šoŋakkoo 「小学校」, čuŋakkoo 「中学校」のように /g/ が [ŋ] と発音されているのに対し、kootogakoo 「高等学校」と [ŋ] にならないのは、前者は gakkoo の前に複合境界があり、後者はその前に単語境界がある為である。同様に、kootoo#kyooiku 「高等教育」、kootoo#saibanšo 「高等裁判所」にも複合語有声化規則が適用されない。

B. 子音の鼻音化

$$10B. \left[\begin{array}{c} C \\ +voice \end{array} \right] \longrightarrow [+nasal] / [+nasal] \text{---}$$

有声子音は鼻子音の次に来る場合は鼻子音になる。規則は「[+nasal] の次」となっているが、鼻母音の場合はその次が必ず鼻子音なので、この規則を適用して鼻音にする必要がない。規則の適用環境に合う「[+nasal] の次」とは、「鼻子音の次」ということになる。

cinju→cinjũ 「地図」, enda→endã 「枝」, xembi→xembĩ 「蛇」, kando→kãdõ 「感動、角」, konro→konrõ 「コンロ」, kanwa→kanwã 「緩和」。

C. 母音の鼻音化

$$10C. V_1 \longrightarrow [+nasal] / [+nasal]$$

すべての母音は鼻音の前と後に来る場合、鼻母音となる。V₁ は一つ以上の母音を意味するので、二つ以上連鎖している母音すべてが鼻母音となる。この規則は隣接規定 (neighborhood convention) によって簡略化したものであり、次の規則と同じである。

$$10(a) V_1 \longrightarrow [+nasal] / \left\{ \begin{array}{l} \text{---} [+nasal] \\ [+nasal] \text{---} \end{array} \right\}$$

cinju→cinjũ 「地図」, kanji→kãnjĩ 「火事、監事」, keŋŋa→kẽŋŋã 「怪我」, endã→endã 「枝」, xembi→xembĩ 「蛇」, kãdõ→kãdõ 「感動、角」, konrõ→kõnrõ 「コンロ」, kanwã→kãnwã 「緩和」, eppõn→eppõn 「1本」, kaanee→kãanee 「買わない」, keenee→kẽenee 「食えない」。

11. 鼻子音の消去

$$11. \left[\begin{array}{c} C \\ +nasal \end{array} \right] \longrightarrow \phi / \text{---} \left]_{s,1} \right.$$

鼻子音は、音節の最後の分節音であれば消去される。

cĩn-jĩi→cĩjĩi 「地図」, kãn-jĩi→kãjĩi 「火事、監事」, en-dã→ẽdã 「枝」, xem-bĩi→xebĩi 「蛇」, kã-dõ→kãdõ 「感動、角」, kõn-rõ→kõrõ 「コンロ」, ep-põn→eppõ 「1本」, kãn-wã→kãwã 「緩和」, kãm-bũn→kãbũ 「漢文」, ɣãŋ-ko→ɣãko 「判こ」, sãm-po→sãpo 「散歩」, ɕi-cũn-jĩi→ɕicũjĩi 「羊」。

この規則は、鼻子音が連鎖している場合、前の鼻子音を消去するか、あるいは語尾の鼻子音を消去するものであるから、次のようにも書けるであろう。

$$11(a) \left[\begin{array}{c} C \\ +nasal \end{array} \right] \longrightarrow \phi / \text{---} \left\{ \begin{array}{l} [+nasal] \\ \# \end{array} \right\}$$

しかし「[+nasal] か [#] の前」という環境では、この二つの特徴には音韻的に見て関連

がないので、11(a)の規則よりは、二つに共通した特徴である音節境界で分けた規則11の方がより簡潔であり、自然のように思われる。

又、 $enda \xrightarrow{10B} \tilde{e}nda \xrightarrow{10C} \tilde{e}\tilde{d}\tilde{a} \xrightarrow{11} \tilde{e}\tilde{d}\tilde{a}$ 「枝」のように子音の鼻音化、母音の鼻音化、鼻子音消去の三つの規則を適用するよりも、次に挙げる子音の鼻音化と鼻子音消去を一緒にした規則11(b)で $enda \xrightarrow{11b} \tilde{e}da \xrightarrow{10c} \tilde{e}\tilde{d}\tilde{a}$ のように派生する方が妥当と思われるかも知れない。

$$11(b) \left[\begin{array}{c} C \\ +nasal \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} C \\ +voice \end{array} \right] \longrightarrow \left[\begin{array}{c} C \\ +voice \\ +nasal \end{array} \right]$$

しかし、ゆっくり話す時、特に単語一つを云う時には $\tilde{e}\tilde{d}\tilde{a}$ という発音が良く聞かれるので、二つの規則を11(b)のように一つに出来ない。それは前にも述べたように、有声阻害音を鼻子音にせず、その前に鼻音を挿入したのと同じ理由である。

12. 子音の有声化

$$12. [-continuant] \longrightarrow [+voice] / [+voice] \text{---} [+voice]$$

非継続音 (-continuant), すなわち破裂音と破擦音は、母音間で有声音となる。鼻子音はすべて有声音なので適用するまでもない。

cuki→cugi 「月」, gake→gage 「崖」, cuci→cuji 「父」, uta→uda 「歌」, χ otaru→ χ odaruru 「螢」, \tilde{s} enaka→ \tilde{s} enaga 「背中」, \tilde{n} ekoje→ \tilde{n} egoje 「猫背」, Φ uku→ Φ ugu 「服」, Φ uci→ Φ uji 「緑」, suki→sugi 「好き」, Φ uki→ Φ ugi 「路」, cukue→cugue 「机」, okita→ogida 「起きた」, kaku χ →kagu χ 「隠す」, kiku→kigu 「菊」, saku Φ uu→sagu Φ uu 「作風」, dokuxaku→doguxagu 「独白」。

次の語は鼻音であるかどうかによって意味の区別がなされる。

$$\begin{array}{l} \left\{ \begin{array}{l} \overline{mado} \text{ 「的」} \\ \tilde{m}\tilde{a}\tilde{d}\tilde{o} \text{ 「窓」} \end{array} \right. \quad \left\{ \begin{array}{l} \overline{eda} \text{ 「居た」} \\ \tilde{e}\tilde{d}\tilde{a} \text{ 「枝」} \end{array} \right. \quad \left\{ \begin{array}{l} \overline{agari} \text{ 「明り」} \\ \tilde{a}\tilde{g}\tilde{a}\tilde{r}\tilde{i} \text{ 「上り」} \end{array} \right.$$

非継続音には /p/ もあるのだが、すでに規則9で摩擦音になっているので有声化規則の適用がない。9と12は bleeding order である。又、10Aの /g/ の鼻音化規則と規則12の順序は counter feeding order である。つまり、もし12→10Aの順序で適用されるとしたら、有声音になった /k/ は、更に鼻音になる。

$ake \xrightarrow{12} age \xrightarrow{10A} *a\eta e$ 「赤い」, $kaku\chi \xrightarrow{12} kagu\chi \xrightarrow{10A} *ka\eta\chi$ 「隠す」。

子音の有声化規則は複合語有声化規則とは別のものである。/s/ は継続音のため有声音にはならない。

χ asi→* χ azi 「箸」, kasi→*kazi 「菓子」。

13. 同一分節音消去

同じ母音、あるいは子音が連鎖している場合消去される。

A. 同一母音の消去

$$13A. \begin{bmatrix} V \\ \alpha \text{ high} \\ \beta \text{ back} \\ \gamma \text{ low} \end{bmatrix} \rightarrow \phi / \begin{bmatrix} V \\ \alpha \text{ high} \\ \beta \text{ back} \\ \gamma \text{ low} \end{bmatrix}$$

13Aは二つの同じ母音が連続して起る場合、そのうちの一つを消去するものである。この規則は簡単に $V_iV_i \rightarrow V_i$ と書ける。

$kaee \rightarrow kae$ 「痒い」、 $kee \rightarrow ke$ 「痒い」、 $kawanee \rightarrow kawane$ 「買わない」、 $kaanee \rightarrow kane$ 「買わない」、 $kaanee \rightarrow kane$ 「食わない」、 $keenee \rightarrow kene$ 「食えない」、 $kaeee \rightarrow kae$ 「可愛良い」、 $kaweeee \rightarrow kawee \rightarrow kawe$ 「可愛良い」、 $yowee \rightarrow yowe$ 「弱い」、 $yoe \rightarrow yoe$ 「弱い」、 $ee \rightarrow e$ 「良い」、 $ookii \rightarrow oki$ 「大きい」、 $osii \rightarrow osi$ 「惜しい」。

B. 同一子音の消去

$$13B. \begin{bmatrix} \alpha \text{ place} \\ \beta \text{ manner} \end{bmatrix} \rightarrow \phi / \begin{bmatrix} \alpha \text{ place} \\ \beta \text{ manner} \end{bmatrix}$$

同じ子音が続く場合、一つを消去する。この規則も簡単に $C_iC_i \rightarrow C_i$ と書ける。

$epp\tilde{o} \rightarrow ep\tilde{o}$ 「1本」、 $essacu \rightarrow esacu$ 「一冊」、 $rokk\tilde{a} \rightarrow rok\tilde{a}$ 「6巻」、 $katte \rightarrow kate$ 「勝手」。

否定の接尾辞を /ana/ とし、動詞の現在形の接尾辞を /ru/ とするならば、 $tabe\&ana$ 「食べない」、 $kaw\&ru$ 「買う」という基底表示になる。これらの語の音声表示を派生するためには、次のような [&] の次の分節音を消去する規則が必要である。

$$13(a) V_1V_2 \rightarrow V_1 \quad 13(b) C_1C_2 \rightarrow C_1$$

これらの規則は同一分節音を消去するとは限らないので、13A、13Bの規則とは異なる。13(a)、13(b)はずっと早い段階で適用されるべきであり、13A、13Bの消去規則と同じレベルで扱われるべきではないと思われる。

子音の有声化規則と同一子音の消去規則は counter feeding order である。消去 \rightarrow 有声化の順序は feeding order であって、この順序の適用は間違った音声表示を派生する。

$rokk\tilde{a} \xrightarrow{\sim 13B} rok\tilde{a} \xrightarrow{\sim 12} *rog\tilde{a}$ 「6巻」、 $katte \xrightarrow{13B} kate \xrightarrow{12} *kade$ 「勝手」。

14. /s/の口蓋音化

/s/ は /e/ の前で [š] か [x] になる。

$$14. \begin{bmatrix} +\text{coronal} \\ -\text{voice} \\ +\text{continuant} \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} +\text{high} \\ (-\text{coronal}) \\ +\text{back} \end{bmatrix} / \begin{bmatrix} V \\ -\text{high} \\ -\text{back} \\ +\text{Native} \end{bmatrix}$$

この規則の意味は、無声舌頂継続音 (/s/ と /š/ が対象となるが、音素としては /s/ しかない) が /e/ の前で [+high], つまり [š] になるか、あるいは [x] になるというものである。

sēnāga→šēnāga, xēnāga 「背中」, segi→šegi, xegi 「堰」, kaseŋū→kašēŋū, kaxeŋū 「稼ぐ」, xānāse→xānāše, xānāxe 「離せ」, aseru→ašeru, axeru 「焦る」, sebōnē→šebōnē, xebōnē 「背骨」, ase→aše, axe 「汗」。

この規則は和語に適用する規則であり、漢語や外来語には通常適用されない。

sē→*šē, *xē 「線」, seetae→*šeetae, *xeetae 「声帯」, sisee→*sišee, *sixee 「姿勢」, sēsoo→*šēsoo, *xēsoo 「戦争」, sete→*šete, *xete 「先手」, taesee→*taešee, *taexee 「大勢」, xaese→*xašē, *xaexē 「敗戦」, šuse→*šūše, *šuxe 「出世」, seetaa→*šeetaa, *xeetaa 「セーター」, akuseru→*akušeru, *akuxeru 「アクセル」。

規則14は一般的な規則であり個人差がある。一個人で [š] と [x] の両方を発音する人はいない。人によっては /s/ を [š] にするのは語頭のみにし、kasegu 「稼ぐ」, aseru 「焦る」, ose 「遅い」などの /s/ は /š/ にならない。

kasegu→kaxegu, *kašegu, aseru→axeru, *ašeru, ose→oxe, *oše.

又、人によっては、語頭の /s/ を漢語、外来語の場合でも /š/ とする。

sē→šē, *xē 「線」, seetae→šeetae, *xeetae 「声帯」, seetaa→šeetaa, *xeetaa 「セーター」。

しかし、語頭の /s/ を [š] にし (šenaga 「背中」), 語中の /s/ を [x] にする (axeru 「焦る」) というように、[š] と [x] の両方を使い分ける人はいないようである。つまり、sekaseru 「せかせる」, sensei 「先生」は、šegašeru や xegaxeru 「せかせる」, šēše や xēxe 「先生」という発音は可能でも、*šegaxeru や *xegašeru, *šēxe や *xēše は可能な発音ではない。なお、sensei 「先生」や se 「背」は漢語であるが、例外的に /s/ が [š] や [x] に発音されている。

前に規則9Dで /Φ/ が /e/ の前で [x] になると述べた。ここで述べている /s/ が [e] の前で [x] になる規則14と一つの規則として次のように書けるだろうか。

$$14(a) \left[\begin{array}{l} +\text{anterior} \\ +\text{continuant} \end{array} \right] \longrightarrow x / \text{---} e$$

問題の一つに、/Φ/ (←/p/) と /s/ は全く別の種類の音素であり、se→xe は随意的であるのに対して、Φe→xe は必然的であることが挙げられる。更に又、規則14は漢語には適用されないが、規則9Dにはそのような制限がない。従って、これら二つの規則は異なるものとした方がよい。次の対を見よう。

{senka	→ *xenka	「戦火」
{Φenka	→ xenka	「変化」
{seitai	→ *xeitai	「声帯」
{Φeitai	→ xeitai	「兵隊」
{seikou	→ *xeikou	「成功」
{Φeikou	→ xeikou	「平衡」
{kisei	→ *kixei	「規制」
{kiΦei	→ kixei	「騎兵」

15. /j/の硬口蓋音化

$$15. \left[\begin{array}{l} +\text{anterior} \\ +\text{coronal} \\ +\text{voice} \\ -\text{continuant} \\ +\text{strident} \end{array} \right] \rightarrow [-\text{anterior}] / \left[\begin{array}{l} \text{V} \\ -\text{high} \\ -\text{round} \\ -\text{Sino-Japanese} \end{array} \right]$$

歯茎破擦音 /j/ は /e/ と /a/ の前で [j] になる。

jenĩ→jēnĩ「銭」, nēgoje→nēgoje「猫背」, jēnesuto→jēnesuto「ゼネスト」, jaru→jaru「筧」, jeko→jako「雑魚」, yamājaru→yamā jaru「山猿」, gōjā→gōjā「莫産」。

漢語にはこの規則は適用出来ない。

jecūmēcū→*jecūmēcū「絶滅」, jēsĩ→*jēsĩ「前進」, jasi→*jasi「雑誌」, gĩjā→gĩjā「銀座」。

/j/ が [j] と発音されるのは非高母音の前であるが、/o/ は円唇音なので規則が適用されない。津軽方言の /o/ を円唇音とするのには問題があるかも知れないが、それは円唇の程度の問題であり、ここでは一応 [+round] として扱う。

kucujogo→*kucujogo「靴底」, sojoroarugi→*sojoroarugi「漫ろ歩き」, jokkō→*jokkō「ぞっこん」, jōō→*jōō「ゾーン」。

16. 高母音の中舌化

$$16. \left[\begin{array}{l} \text{V} \\ +\text{high} \end{array} \right] \rightarrow [\text{central}] / \left[\begin{array}{l} +\text{anterior} \\ +\text{strident} \end{array} \right]$$

高母音 /i, u/ は、歯茎さしみ音 /s, c, j/ の次に来る場合、中舌母音 [i] となる。

cĩjũ→cĩjĩ「地図」, cugi→cigi「月」, cuju→ciji「筒」, cuji→ciji「土」, ciji→ciji「父」, kasi→kasi「菓子」, kasu→kasi「粕」, kajĩ→kajĩ「火事、監事」, kajũ→kajĩ「教」, susi→sisi「寿司」, sisi→sisi「獅子」, susu→sisi「煤」, jisacu→jisaci「10冊」。

9 Fの規則で /Φ/ が /i/ の前で [s] になるのだが、更に /i/ は [i̥] となる。規則の順序は feeding order である。

pito^{9A}→Φito^{9F}→sito¹⁶→s̥ito 「人」, pidoi^{9A}→Φidoi^{9F}→sidoi¹⁶→s̥idoi 「酷い」, pikooki^{9A}→Φikooki^{9F}→sikooki¹⁶→s̥ikooki 「飛行機」。

17. /u/ プラス鼻音

A. /u/ の消去

$$17A. \begin{bmatrix} V \\ +high \\ +back \end{bmatrix} \longrightarrow \phi/\# \longrightarrow \begin{bmatrix} +anterior \\ -coronal \\ +nasal \\ +sonorant \end{bmatrix} \begin{bmatrix} V \\ -high \\ -round \end{bmatrix}$$

語の /u/ は /me/, /ma/ が次に来る場合消去される。17Aの中の弁別的素性 [+sonorant] は、/b/ と /m/ を区別する為必要である。

ũma→m̃a 「馬」, ũme→m̃e 「梅, うまい」, ũmebos̃i→m̃ebos̃i 「梅干し」, ũm̃areda→m̃areda 「生まれた」, ũm̃anōri→m̃anōri 「馬乗り」, ũmeru→m̃eru 「埋める」。

/u/ 消去の後 [ma] にアクセントがある場合、アクセントは次の音節に移動する。しかし、アクセント移動は語境界内で行われる。

ũmaŋoya→m̃aŋoya 「馬小屋」, ũmaya→m̃aya 「馬屋」, ũma#no#ŋone→*m̃anoŋone, *m̃anoŋone 「馬の骨」。

/m/ の次の母音が /e, a/ でない場合には、/u/ は消去されない。

ũm̃oreru→*m̃oreru 「埋れる」, ũm̃is̃ita→*m̃is̃ita 「生みした」, ũm̃ũ→*m̃ũ 「生む」。

更に、/u/ は、語頭にない場合は消去されない。t̃aneuma→*t̃anema 「種馬」, agaume→*agame 「赤梅」。

B. /u/ の鼻子音化

$$17B. \begin{bmatrix} V \\ +high \\ +back \\ -accent \end{bmatrix} \longrightarrow \begin{bmatrix} +anterior \\ \alpha \text{ coronal} \\ +nasal \\ +sonorant \end{bmatrix} / \# \longrightarrow \begin{bmatrix} +anterior \\ \alpha \text{ coronal} \\ +nasal \\ +sonorant \end{bmatrix}$$

語頭の /u/ は次の /m/, あるいは /n/ に完全同化する。連鎖する二つの鼻子音は、次の例の如くアクセントの異なることがある。

ũma→m̃ma 「馬」, ũme→m̃me 「梅, うまい」, ũmaŋoya→m̃maŋoya 「馬小屋」, ũmeru→m̃meru 「埋める」, ũm̃oreru→m̃m̃oreru 「埋もれる」, ũm̃inari→m̃m̃inari 「海鳴り」, ũm̃idas̃i→m̃m̃idas̃i 「生み出す」, ũnaŋi→ñnaŋi 「鰻」, ũneri→ñneri 「うねり」。

/u/ にアクセントがある場合は、この規則は適用されない。

ũmi→*m̃mi 「海」, ũni→*ñni 「うに」, ũm̃ũ→*m̃m̃ũ 「生む」。

云うまでもなく、17Bは同一子音消去規則の後に適用されなければならない。二つの規則は counter feeding order の関係にある。

参 考 文 献

- Chomsky, Noam & Morris Halle. 1968. *The Sound Pattern of English*, Harper & Row.
Kenstowicz, Michael & Charles Kisseberth. 1979. *Generative Phonology*, Academic Press.
McCawley, James. 1968. *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*, Mouton.
清水克正. 1978. 『生成音韻論概説』, 篠崎書林.